

《参考資料》

広大な馬の放牧場の史跡をたどる。

下野牧二和野馬土手

しものまきふたわのまどて

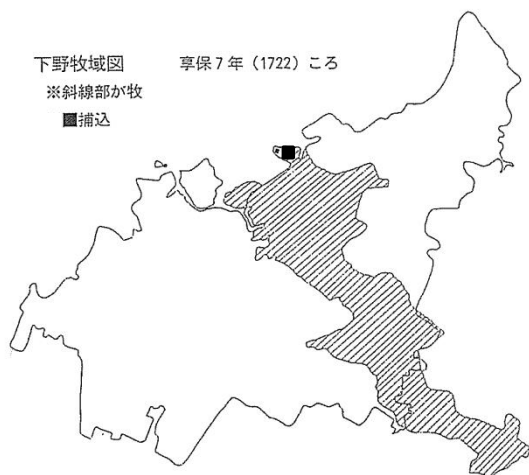
野馬土手は、江戸時代に、江戸幕府が設置した馬の放牧場にかかわる遺跡です。

目の前で常時見ることができる珍しい遺跡の一つでもあります。

千葉県北部に広がる^{しもうさだいち}下総台地上には、^{こがね}小金牧（5つの牧場の総称）、佐倉牧（7つの牧場の総称）があり、船橋市内にあったのは、^{まき}小金牧の一つ、^{しものまき}下野牧です。馬の放牧場と言っても、現在の千葉市花見川団地付近～船橋市^{さき}咲が丘まで、ちょうど船橋市中央部を縦断するように続く、広大なものでした。



下野牧二和野馬土手 高さ2m以上のところもあります。



野馬が外に出ないように、牧の周りや内には土手や堀が築かれました。

寛政期（1789～1800年）には、^{のまよけ}野馬除土手は、^{そうえんちょう}総延長19488間（約35.4km）、^{せこ}勢子土手は4020間（約7.3km）ありました。幕末には約200頭の野馬が牧に放し飼いにされていました。

下野牧二和野馬土手は、市内では最も保存状態が良好な土手です。所々、途切れていますが、東西に一直線の約490mの土手が現在も残っています。このなかで、最も残りのよい約190mのうち、土地所有者の方の同意を頂いた部分を、船橋市文化財（史跡）として指定しました。

描かれた土手

江戸時代後期に記された『成田参詣記』^{なりたさんけいき}には、下野牧で行われた野馬執り^との様子が描かれています。右の図には、勢子^{せこ}や馬に乗った牧士^{もくし}が、野馬を追い込む様子や土手の上で野馬執りを見学する人々の様子が描かれています。ここに描かれている土手が「このたび指定となった「下野牧二和野馬土手」と考えられます。



「下野牧野馬執の図」『成田参詣記 巻之三』より 船橋市西図書館蔵

市内に残る野馬土手

市内に残る見学可能な野馬土手には、高根台第二小学校の南側や船橋日大前駅近くにある「坪井・習志野台境野馬除土手」があります。



下野牧二和野馬土手の断面写真。土を積み重ねて土手を築いた様子が発掘調査時の土層から見てとれる。

「野馬除土手」・「勢子土手」用語説明

牧に放たれている馬は「野馬」と呼ばれました。牧の日常管理は「牧士」と呼ばれた近隣の村の有力者から選ばれた人達を中心に村々の人が担いました。

土手には、野馬が村の畑等に入らないように、牧と人々が暮らす村との境に築かれた「野馬除土手^{のまよけ}」。定期的に「捕込^{とつこめ}」と呼ばれる場所に、野馬を追い込みました。そのときに、追い立てる人々（勢子^{せこ}）が馬を追い込みやすいように牧の中を仕切る「勢子土手^{せこ}」などがありました。土手には、堀が伴うことが多く、堀は「野馬堀^{のまぼり}」と呼ばれます。

牧の地名

○船橋市周辺には「高根木戸^{きんど}」など、「木戸」と名のつく地名が多くあります。これは牧を通る道の出入り口に設置された木のゲートがあった場所です。野馬が牧の外に出ないように設置されました。

○小金牧と佐倉牧は、明治時代になると廃止され、東京から移住者や近隣の農家の人々によって、開拓されます。開拓地は、開拓した順番と縁起の良い字を組み合わせで地名が付けられました。最初の開拓地は、「初富^{はつとみ}」、二番目は「二和^{ふたわ}」、三番目は「三咲^{みさき}」と付けられました。四番目以降は、豊四季^{とよしき}・五香^{ごかう}・六実^{むつみ}・七栄^{ななえい}・八街^{やちまた}・九美上^{くみあげ}・十倉^{とくら}・十余一^{とよいち}・十余二^{とよふた}・十余三^{とよみ}となり、13まであります。

下野牧を描いたものではないと考えられていますが、小金牧全体がこのような風景であったと思われます。



初代広重 「富士三十六景 総小金原」 安政5年（1858）